「白樺」の運動

武者小路實篤

PL Mushakoji, Saneatsu
726 Shirakaba no undo
.6
M87

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

岩波講座 日本文學

「白樺」の運動

武者小路實篤

岩波書店

「白樺」の運動

武者小路實篤

PL
...
M88

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

LIBRARY
SEP 24 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

http://www.archive.org/details/shirakabanound00mush

○

「白樺」と云ふ雜誌が出たのは明治四十三年四月である。自分達はこの雜誌によつて新しい文學運動を起さうとは思はなかつた。だが正直に云つて、當時の文壇に滿足はしてゐなかつた。自分達は夏目漱石を愛してゐた。しかし漱石の弟子と云ふわけでもなかつた。その他では同人によつて少しのちがひはあつたが、獨步、二葉亭などが好意をもたれてゐた。藤村を好きな人もあつた。

その時分の白樺同人で、今なほ文學の仕事をしてゐるもの、旣に故人にはなつたが、文學者として使命を果した人などをあげると、次ぎの人々である。

有島武郎、有島生馬、志賀直哉、武者小路實篤、木下利玄、園池公致、兒島喜久雄、里見弴、長與善郎、柳宗悅、郡虎彥、等である。年齡順にならべた。

それ等は皆、學習院出身の人々である。しかし學習院の出身の人計り集めたわけではなかつた。それ等の人が友達としてつきあつてゐたので、一緒に雜誌を出すことになつただけである。

世間では我等を白樺派と云つたが、我等は別に、主義や、主張や、立場が同一だから一緒になつたのではなかつた。各自自分の立場をもつてゐた。たゞ友人だから、お互に同化する處は同化しあつた。しかしちがふ處はいつまでいつてもちがつてゐる。しかし他の人から見たら、白樺の人達には白樺の人らしい色彩があると思ふ。しかし自分達は何

處までも自己に忠實になることを要求してゐた。お互に議論もし、批評もしあつたが、お互の立場と個性を尊敬しあつて、同色にならうとは思はなかつた。

志賀と僕とは同級だつた。志賀は僕より二つ齡上だつたが、僕の級におちて來た。總平均は七點以上あつて、落第したのは志賀がレコードで、志賀より總平均がよくつて落ちたものはなかつた。もつと總平均はわるくつても及第した人は澤山あつたが、志賀も運動すれば及第位ゐは出來たらしいが、早くあきらめておつこつて來た。其處で僕と同級になり、一緒に文學をやるやうになつたので、志賀が落ちて來たのは白樺の出來る最初の必要條件だつたかも知れない。だから志賀が落ちて來たのはお互のためによかつた。志賀もよろこんでゐた。

僕の同級では志賀の他に短歌の方で働いた木下利玄がゐた。又途中で他の仕事に入つたが、正親町公和と云ふのがゐた。この四人で回覽雜誌をやつた。それは始め月に一回か二回出したが、そのあとでは每週一回出すことにした。お互に遠慮なく批評しあつた。議論もした。

僕達の回覽雜誌を眞似て二級程下だつた里見、園池、兒島達が又回覽雜誌をやり出し、それから又一つ下の級の柳や郡が回覽雜誌をやり、それをお互に見せあひ、批評しあつてゐる內に白樺の基礎が出來たのである。

有島生馬は志賀と仲のいゝ友達だつたが、その時分西洋から歸つて來て仲間に入つた。有島武郎は生馬や、里見の兄さんだと云ふので、その時札幌で農科大學の先生をしてゐたが入つてもらつた。長與は少しあとで仲間に加はつた。

當時の文壇のことは誰か他の人がかいてくれると思ふが、自然派全盛であつて、田山花袋はしきりと平面描寫を主張してゐた。藤村は破戒をかき、つゞいて二三のものをかき、夏目漱石は不意にあらはれて來て、僕達をおどろかし、

獨歩は人々から賞讃され出し、つゞいて荷風があらはれ、白鳥や青果が頭をもたげて來、小山内も一部に認められ、一方鷗外をかついでゐたスバルなぞがあらはれ、白秋の詩はその特色のある調子で人を魅しかけて居た。

自分達はさう云ふ時に、白樺を出した。つゞいて、潤一郎達の新思潮が出た。

我等の創作はすぐ世間の批評にのぼつた。そして思つたより賞讃された。志賀なぞは隨分早く認められた。勿論、その時既に二十八になつてゐたから、そして今見ても優れた短篇をかいて發表してゐたのだから世間が認めるのは當然でもあつた。僕達も、雜誌を出す少し前から志賀のものは認めてゐた。

武郎はあとになつて問題になつた短篇や、「或る女」なぞを札幌からつゞいて送つて來たが、認められたのは僕達よりもおそかつた。

僕達の作品が當時の他の作品の內にまじつてどんな印象を與へたか、それは他の人の方が知つてゐるわけである。たゞ自分達は、殊に自分は當時の自然主義には滿足しなかつた。

花袋の主張する平面描寫は、僕には出來ないことだけに、なほ腹を立てた。僕達はなんでもいゝ、形式はその人々にそなはつた通りでいゝ。自己に正直に、自己の個性を生かしてゆけばいゝと云ふ考へで、かきたいものを書いていつた。

僕達は特色を無理に出さうとは思はなかつた、たゞ自分の本氣になつてかけるものだけを書かうとした。なんでもかくのではない、自分が情熱を感じてかけるものだけを書かうとした。其處が自然派の人ともちがひ、スバル派の人とももちがつた。

當時自然派の立場にあきたりない雜誌が白樺の他に三つあつた。それはスバルと三田文學と新思潮であつた。それに白樺もよせて四つの雜誌が合併して自然派に戰ひをいどむ計畫を立てた人があつたが、自分達は自然派にもあきたりないが、スバル派にもあき足りない、どつちにも同じ程度に不滿があるのだから、その仲間に入る氣にはなれなかつた。

共處がいつのまにか白樺の特色になつたのだと思ふ。我等は特色を無理に出さうとは思はなかつた。他のものにあきたりないので、自分で、自分の要求する文學をうみ出さう、それが僕達の運動と云へば運動であつた。

正直に云ふと白樺の同人は皆同じ思想を持つてゐるわけではなかつた。一つの小さい雜誌からともかく五六人の優れた作家を出した點で白樺の使命は果したことになるが、その一々の作家に就て批評するのは僕よりも他に適當な人があるかと思ふが、簡單にかくと、有島武郎は學習院を途中でやめ、札幌の農學校を出た。札幌の農學校からはいろいろ特色のある人を出してゐる。その內でも有名なのは內村鑑三、新渡戶稻造等であるが、武郎もそれ等の人の一人、恐らく最後の一人と云つてもいゝのではないかと思つてゐる。學校を出てから米國にゆき、いろ〳〵の經驗を得たことは彼の著作を見ればわかることである。今一々それを吟味する暇をもたないが、米國で精神病の病院につとめてゐた時、今迄熱心だつたキリスト教に疑ひをはさみ、それからトルストイ、クロポトキンなぞの影響をうけ、晩年はマルクス主義の影響をうけたかと思ふ。

米國から歐洲へ旅行し、白樺の出る前年に日本に歸つて來、母校で英語の先生をすることになつた。學問のあつた點で夏目さんの後繼者と云へるかと思ふが、性格や、學問の範圍は隨分ちがつてゐたやうに思ふ。有島武郎は稀に見

る眞面目な、親切な、優しい男だつた、そしてかくものは少し概念的な所があつたが、かく意味がはつきりして讀んで損するやうな作品は一つもかゝなかつた。どれも意圖がはつきりし、全力的であつた。文體もしつかりして、重味があつた。ものの見かたに型があつたが、自然描寫も、人間の心理描寫も共にしつかりしてゐた。北海道とか、アメリカとかの背景は彼の作品を多彩にした。

世間から認められることは隨分おそかつたが、一度認められると、彼の舊作まで人々は今更におどろいて見た。本能的な所が少し足りないと思つたが、細君を失つた時かいた「死とその前後」にはその缺點はなく、隨分突込んでかいてあつた。最後の人妻との死も、僕達を驚かしたが、しかし武郎らしい眞面目さがあつた。武郎の一生の內で理窟に囚はれず、本能的な唯一の行動であつたかも知れない。

彼は又畫をよくし、彼の旅行中のペン畫なぞ、中々味のいゝものである。彼の作の內では「ある女」、「宣言」、「カインの末裔」、「小さき者へ」等々澤山のよき作品がある。小說にも脚本にも優れたものが澤山ある。その他、イブセン、ホイツトマン、ミレーなぞの硏究もあり、彼の趣味と頭のよさを示してゐる。

有島生馬は武郎の弟で畫家の方が本職である。小說にも中々いゝものがある。彼は畫家である前に少年詩人でもあつた。小さい時から才能があらはれ、學習院でも評判だつた。學習院を途中でやめ、外國語學校で伊太利語をならひ、藤島氏について畫を學び、フランスに出かけた。歸つて二科會を起したことは人の知る所である。近頃あまり文學的仕事をしないやうだが、今後又面白い仕事を發表する時があるであらう。

里見弴は生馬の又弟である。兄弟の內三人がそろつて日本の文藝のために働き、各々特色を出してゐる點で珍らし

い兄弟と云へる。里見は小説家として、他の兄弟よりずつと藝人肌の處がある。彼は文章に巧みで、眞心をとき、「多情佛心」をかき、「安城家の兄弟」その他をかく、彼はへんに正直な男で、才があるが、つくりものはかゝない。何處かに自分の生活をかき、自分の主觀をかく、彼に宗教的な處や、哲學的な處は求められないが、彼の知つてゐる範圍の生活をかゝせば、類のないものをかく。彼は學習院を出た後、帝國大學の英文科に一寸席をおいたが、すぐやめて、文學專門で立つてゐる。脚本もいくつかかいてゐるが、小說の方が純粹で、又本氣な仕事があるやうに思ふ。脚本も舞臺にのぼせると面白くよくかけてゐるが、小說の方になほ適してゐるやうに思ふ。花柳界に材をとつたものが多い。しかしそれは美化されてはゐない。人間の世界としてかゝれてゐる。

志賀直哉は多くの優れた短篇と、二三の長篇をかいてゐる、彼の作品は量は多いとは云へないが質はすぐれてゐる。彼について、自分がかいたものがあるので、それをこゝにかいておく。

「志賀は思想家のタイプでも、學者のタイプでもない。彼は小說家だ。志賀の話はいつもそのまゝ優れた小說的描寫に滿ちてゐる。支那に旅行して歸つて來た時、支那のある料理屋の話を聞いたが、すぐれた描寫になつてゐた。觀察が緻密で、多角的で、描寫が的確だ。自分では小說風に話してゐるつもりではないが、ものの見方がさう出來てゐる、生活や見方が小說家としてイタについてゐる。……志賀の小說は目の小說ではない。實に見てゐるが、心が伴はずには見てゐない。だから單なる見聞記は彼にはかけない。自分の經驗したことでないとかけない。志賀が見るのは外見ではない。其處にあらはれてゐる人間の心の動き、境遇、生活、運命、その上それにたいする價値判斷が加はつてゐる。だから見物でなく觀察になるのだ。其處で小說が生れるわけだ。……觀察と生活がとけあひ、結びあつて、

お互に助けあふ點で志賀のやうに渾然としてゐる作家は少ないと思ふ。」

志賀の趣味、神經、價値判斷、それは志賀の生命にとつて切りはなせないものだ。彼は客觀的なものをかき、自己にはなれたものをかくのが一方好きらしいが、しかし自分が經驗しないものは一つもかゝないと思ふ。其處が彼の強味であり、その眞實さが、白樺派の特色をなしてゐる。

長與善郎は日本人としては珍らしい作家である。彼は東洋的なものを愛し、東洋人趣味を多量にもつが、描寫や、エネルギーに幅廣い處がある。彼は複雜なもの、深いものをかく、彼は一面思想家である。その點、以上の人の内では有島武郎に似てゐるが、もつと本能的で、皮肉である。ものの裏面を見る。表面も見るが、裏面も見のがさない。

彼は力強いものを愛し、又老子風な考へ方や、見方を愛する。彼は多くの小說と脚本をかいてゐる。長篇の方が寧ろ得意と思はれるが、短篇にも中々いゝものがある。ユーモアや皮肉をもつてゐる點で他の以上あげた白樺派の人々とちがふ特色をもつてゐる。日本でもしアンナ・カレニナのやうな大きな描寫の出來る人をさがせば、長與より他にはないと思ふ。長與の仕事にはいつも謎がある。大きな仕事を仕出かしさうな氣合を見せる點で日本では類が少ないと思ふ。自己の生活と考へを持つてゐる。

木下利玄は和歌專門である。その方で彼ぐらゐ、自分の和歌を磨きに磨いた男を知らない。彼は短命で死んだが、彼の仕事はかつちりしてゐる。必ず後世に殘るであらう。始め婉なものをつくるのを好んだが、つゞいて子供を三人失ひ、自分も肺を病み、死ととつくむやうになつて、彼の作品は凄味を加へた。彼も白樺の作家として、眞實を愛した。

柳宗悦は創作家ではない しかし白樺の特色をはつきりした點で、彼は大いに働いた。彼の宗教に關する論文、藝術に關する論文、ブレーク等についての研究は、白樺派の存在をはつきりさせ、多くの人々に感化を與へた。兒島喜久雄の美學や、美術についての論文も白樺派の矜りとすべきである。彼は十二三の時から畫がうまく、神童のおもかげがあつて我等をおどかしてゐたが、美學を專攻して、その勉强と、頭のよさと、皮肉と、ユーモアと純情は珍らしい男を築き上げてゐる。日本で世界的な美術批評家として隨一の力をもつてゐるやうに思つてゐる。郡虎彦は鬼才風の男だつたが、短命だつたので、五六の脚本にその特色を見せてゐるだけだが、惜しい男である。白樺では變り種の才人だが、モダーン的な味では一寸類のない男だつた。ドランやピカソと本當に仲よく出來、恐らくフランスの新しい文學者や、藝術家とは同等に仲よくつきあひ、お互に感化しあつた少數の人間になつてゐたらうと思ふ。

さてどん尻に、武者小路實篤がゐるが、之は自分のことだから、書きいゝやうでかきにくい。自分のものの批評は他の人に任せたい。

しかしよく自分は何が一番自信があるのかと人に聞かれることがある。

「楠正成」、「人間萬歳」と僕は云ふが、しかし「楠正成」にも好きでない處がある。場面と場面の變化の仕方が單調な處があるやうに思ふ。日本で本當の意味の悲劇らしいものをかきたくつてかいたものだが、何處までかけてゐるか、それは他の人に任せる。「人間萬歳」は喜劇であり狂言である。僕のものには狂言風のものが多い。之は僕でないとかけないものと思ふ。現代物では「愛慾」とか、「運命と棊をする男」なぞまあ上げていゝものかと思ふ。小說風

では世間では「幸福者」をあげるが、事實さうかも知れないが、僕は「第三の隱者の運命」により大きさを認めるが、之は空想的で缺點も多いかも知れない。その他「耶蘇」や、感想では「瞑想」(新潮社で出した本では「人生を斯く考へる」になつてゐる、後半は「自然、人生、社會」にのつてゐる。) その後、十幾つの詩と、十許りの一幕物は自分で好きである。それが何々かは一々あげるのは厄介である。

○

個人のことはその位ゐにして、白樺の運動はどう云ふ使命を持つてゐたかを、一寸かきたく思ふ。

「白樺」の出た時は、日本の文壇の主潮は自然主義であつた。そして一方夏目漱石派があり、森鷗外を主とした「スバル」があり、藝術派とも云ふべき人があつた。

自然主義のことは他で誰かゞかくと思ふが、僕達が自然主義にあきたりなかつたのは、かく動機が我々とちがつてゐた點である。つまり何をかくべきかについて考を異にしてゐた。僕達は一部の人からは人道主義者と呼ばれてゐたが、書かないではゐられないことをかくことを使命にしてゐた。理窟はどうでもかきたいことをすなほにかくのが一番いゝと思つてゐた。かきたくなるのは個人の意志ではない。我々に仕事をさせたがる本能に忠實になる、それがつまり一番いゝと思つてゐた。

文學は元來、かゝねばならぬものではない。かゝなくつていゝものなのである。文學はかきたいからかくものでなければならないと思つてゐる。我等は文學を樂しむのも、讀みたいからよむので、他に理由はない。

しかし我等をしてかきたくさせるものは何か。又我等をして、文學を愛させるものは何か。この何かに忠實になら

うと云ふのが我等の運動だとも云へる。

我等は殆んどすべて食ふことには困らなかつた。だから金のため、食ふために文學をやる必要はなかつた。文學を愛するために文學をやつた。なぜ文學を愛するのか。それは文學を愛する本能があるからと思ふ。その本能に出來るだけ忠實になり、その本能を滿足させるために我等は筆をとつたのだ。だから白樺の運動をとくにはこの本能を理解することが必要なのである。

しかし我等は同じ主義に立つて仕事をした仲間ではない。だから同人の内には僕等と考へがいく分ちがふ人もあつた。しかし白樺派と見られる人は、いく分程度の差はあるとしても、文學を熱愛した、そして自己の藝術的良心に忠實だつた。

孔子の言葉に「小人は同じて和せず、君子は和して同ぜず」と云ふ言葉があるが、我等は君子かどうかは知らないが、お互に尊敬し、仲よく仕事をしてゐたが、同一色にならうとは思はなかつた。自己に不忠實な人は一人もゐなかつた。皆、自分の世界をもち、その世界に入りこんで仕事をした。だから隨分ちがふ味の仕事をしてゐる。しかし共通點があるとすれば、自己に忠實に、自分が滿足するまでやまない力に支配されて仕事をした點である。しかし自己に忠實になると云ふことは、自己で終るのではなく、自己を通して人類の意志、自然の意志をあふれささうと云ふのである。

○

我等の文學上の立場を理解するには、人類が全體として生長しようとする意志がある事實を認めることである。

我等は人類がなぜ生じたか知らないが、人類は日々賢くならうとしてゐること、どこまでも生長しようとしてゐる事實を認める。一つの眞理を知るものはそれを他人に知らさないではゐられない。一人の人が本當に知つた眞理は同時に人類が知つた眞理である。そして人類は眞理を知ることによつて、その眞理を實際に生かすことによつて進歩する。地球が球だと知る時、人は西へ向つてゆくことで東洋に出られることを知り、歐洲の人はアメリカを發見した。一人の人が蒸氣の力を知れば、汽車や汽船はやがて生れる。一人の人が本當に經驗したことは同時に他人が經驗したことになる。文學の祕密は其處にある。

一人の人の經驗、又は心の動きが一人で終はらない、人類全體にそれが傳はる。其處で文學が生れ得る。作家は自分の心の動きを人類全體につたへたいので仕事をするのが本當で、それが人類全體につたはらないのは、力の不足を意味してゐる。しかし力は足りないでも、その本能が作家に仕事をさせるのだ。

だから人類全體につたへるに足るものをかきたくない作家は本當の作家とは思はない。そして實際に於てその能力の程度が、その作家の價値をきめるのだと思ふ。

だから我等は自分のことをかくにしろ、他人のことをかくにしろ、ある事件をかくにしろ、その書く動機は人類全體に自分の心の動きを傳へたい本能に支配されてゐることが必要で、それを意識してやるのでは淺い、もつと本能的であることを必要にする。

敎訓的創作は淺薄を意味してゐる。ものを都合よく見る傾きがあるし、かく前に成心があると、どうしてもかくものがほんたうでなくなる。讀む人間の心が自由自在に動かないし、成長出來ない。さう云ふものを讀むと頭が窮屈に

なる。

無心な處のない作品は面白くない。根が無限に達してゐないと面白くない。

自然は皆無限の根をもつてゐる。どんな小さい草でも、その根を通して吸收するものは無限の味をもつ生命である。一つの草花にも無限の味があるのは、それが意識的に生命をかぎつてゐないからだ。

我等の尊敬する作品は無限な味をもつ作品で、根が吸ふ源が人工的な作品ではない。見かけの不自然はいゝが、根の不自然は困る。

たとへばブレークの畫の如きは不自然とも云へるものがある。だがその想像力は意識的ではなく、無限な處からくる。書くブレークが全心全身でかいてゐる。少しもごまかしがない。生命のあらはれだから、そしてブレークの個性を通したリズムが鳴りひゞいてゐて、其處に生命力がさながらにあらはれてゐる。だからそれで十分なのだ。いくら本當らしくかいても根があさく、思ひつきにすぎないものは我等の心を打たない。

一時的には人をおどかせても、それは一時的にすぎない。底がわかつた人には魅力はない。我等の求める文學は、人類が求めてゐる文學だ。我等の内にある人類的本能を喜ばすものでなければならない。

だからあまり個人的なものは我等をよろこばさない。一人わかりは文學者にとつて最も恥づべきことだ。

我等は我等の內に囁く、人類の言葉を出來るだけ具體的にはつきりかきたい。

○

僕達が文學をやる目的の一つは人類に自分の心の動きを刻み込みたい、そしてそれを見る人に愛を送りたいし、そ

れを見る人の愛を受けとりたい點だ。

僕達は出來るだけ本音をはきたい。他人になつて愛されるより、自己になり切つて他人に嫌はれる方がいゝとも思つてゐる。だが嫌はれるために文學をやるのではない。人類から愛されたいから文學をやるのだ。だが生長し切つてゐない個人に嫌はれることを恐れては、心ある人に愛されることは出來ない。

我等は出來るだけ本音をはいてゆきたいのだ。我等に本音をはかしたがつてゐるものがあることを自分達は信じてゐるのだ。

個人は、個人に與へられた寶を出來るだけ立派にして地上に生かして、そして死んでゆくことを人類は望んでゐる。それが僕達の信仰だ。稻は最上に實ることを望まれてゐる。最上に實つた稻は滿足してこの世が去れる、稻には意識はないかも知れないが、滿足した氣持はあるかも知れない。少くも人間は、人類に役に立つものを自分が持つてゐれば、それを殘らず地上に生み出すことが必要なのだ。

だから文學者は社會から迫害されても、最上の作品を地上にのこしてゆきたくなるのだ。乞食になつても、いゝ詩をのこしたい。それが詩人の願ひであり、人類が詩人に命じてゐる命令である。

このことを本當に知るものは、我等だつたのだ。白樺の人以外に、このことを本當に知つてゐる人が、當時はゐなかつたのだ。今でもこのことを知つてゐる人は存外少ない。

萬葉集はなぜすぐれてゐるか。本音をはいたからである。意識はしないでも本能に純粹になれた。云はないでゐられないので云つた。熟し切つて始めて木からおちた。

エヂプトやギリシヤの彫刻は實にすぐれてゐる。今の我々が見ても感心し切る。之はなぜか、最も正直に、人類の意志に從つて仕事をしたからである。藝術的本能を實に純粹に生かしたからだ。この本能を無視していゝ作をつくらうと思つても、それは出來ない。たまに出來たとしても、それはすぐあきられる。不純な所はくさりやすい。

○

文學講座にかう云ふものの云ひ方はよくないかと思ふ。しかしこの講座の讀者は文學に就て智識をもつてゐる人々だから、僕流にかいても分つて戴けると思ふ。しかし出來るだけ、全體を見通して、わかりやすくかいて見ようと思ふ。

○

僕は文學はいろ〳〵人間があるだけ、いろ〳〵の文學があつていゝと思つてゐる。だから自然主義の文學でも、ロマンチツクな文學でも、プロレタリアの文學でも、決してわるいもの許りとは思はない。その人がさう云ふもの切りかけない人だつたら、さう云ふものをかけばいゝと思ふ。文學はその人に許された材料をかくのが一番いゝのだと思ふ。自分に書くことを許されない世界のことは他の人に任せればいゝと思ふ。どんな材料でもその人が人間である以上、その人が本當に思ひ、本當に考へ、本當に感じたことを、ムダなく、空虛な處なく、嘘なく、正直に、純粹な文章でかくことが出來れば、それが立派な文學になると思ふ。たゞその人が生長してゐない人だと、ものの見方、感じ方が未熟で、よむものがはがゆさを感じる。さう云ふものは、讀む人がいやがるのは仕方がない。我等が文學をよむのは、喜びたいからで、はがゆがつたり、つまらなかつたりしたら讀みたくないのがあたりまへだ。自分の知らない

ことを知つてゐたり、自分より頭がよく動いてゐたり、するものでないと讀みたくない。かく者が、讀者より頭の動きが鈍かつたら、讀者に輕蔑されるのはやむを得ない。だから自分がかくものに對しては、他の誰よりもよく知り、よく考へ、よく見てあることが必要だ。そしてそれ以上、これ等のものがよく融け合ひ、そしてかいてゐる人のリヅムが有機的に生きてゐないといけない。

讀んでゆく内に文章を忘れ、時間を忘れ、處を忘れ、かゝれた世界に入りこんでしまふ。これだけの力が必要だ。中には文章の調子の高さ、香りと云ふものを感じさせるものでいゝものもあるが、その時も大事なのは心のうごきである。

文學は頭を動かさずにはかけないものだが、同時に心の動きが必要だ。頭や心がよく動いてゐるものをよむと、我我の頭もよく動き、生々して來、新鮮な感じをうける。新鮮な生々した感じをうけない文學は、文學としての價値がない。少くも價値が少ない。

白樺の人はさう云ふ考をもつてゐるから、各自、自分が一番よく知つてゐること、一番強く感じ得ることを書かうとしてゐる。

何でもかくと云ふのではなく、一番自分にぴつたりかけるものを書かうとしてゐる。

○

白樺の人は殆んど全部、食ふことに困つたことがない。少年時代に於て、頭の一番かたまる時代に於て、何事の印象も一番強く感じる時に於て、食ふことに困らなかつた。それで白樺の人のかくものは、食ふに困らない人が多い。

だから食ふことを卒業した人で始めて本氣になれることが彼等のかくものの主題になりやすい。勿論、彼等のかいたものの内にも、殊に武郎のものなぞには勞働者や、放浪人が出てくるのがあるが、武郎は一體白樺の人として生長したのではなく獨立して生長し切つたあとで白樺の仲間に入つたので、白樺の他の人とは少しかきかたを異にして、外部から見てものをかくことがいくらか出來る質だつたかと思ふ。其處が彼の作をいく分概念的にさせた。

白樺の特色を最もよく出してゐる人々は、人間を外からかくよりは、うちからかくことに苦心をしてゐる。白樺の人達は實感と云ふものを大事にしてゐる。實感をもたないことは何一つ書かないやう注意してゐる。

内面的の眞實、それが大事なことを知り、そして不確實なことはかゝない、其處に白樺の人の藝術的良心があるわけである。

彼等は食ふためにかく必要がなかつただけ、時代や社會に要求されてかく必要がなかつただけ、自分の藝術的良心を大事にした。それに背くことを何より恥とした。

描寫に内からかくのと、外からかくのとある。内からかくのは、出てくる人物の言葉なぞも内から必然に發せられるものをかかうとする。たとへば或る人が或る場合に限り或る言葉は發せられる。それを外からかく時は、その人の云はれた言葉を、かう云ふ場合、かう云ふ時には、こんなことを云ふだらうと机の上で考へてかく。しかし内からかくものは、身自身が其處にゐて、思はず云ふ言葉をかかうとする。實感からあふれた言葉をかかうとする。武郎さんのものには時に外からかいたらしい言葉がある。しかし白樺の他の人達はさう云ふ言葉は出來るだけ出さないやうに注意してゐる。志賀なぞはそのいゝ例と思ふ。

實感にないことをかくことは自然に背くことのやうに白樺の人は思つてゐる。白樺の人は噓らしいことをかくのはおそれない、僕なんか隨分出たら目をかく、だが云つてゐることは眞實から少しでもはなれることを恐れる。其處に白樺の人のよい所がある。

他の人のものをよむとさう云ふ點、武郎以上何倍も無神經な人が多く、氣になるのである。

○

實感は先天的なものである。先天的なものが後天的なものに出あつて發する感じだとも云へるかも知れない。感じるのは自己であるが、自己をしてさう感じさせるのは自然である。その感じこそ無限な生命からあらはれるものである。だからその實感をいつはることは、自然をいつはることになる。

苦しい時は苦しいし、嬉しい時は嬉しい。その苦しさ嬉しさにもいろ〳〵ある。そのいろ〳〵さの面白味を知る處に、人間の面白味がある。

どうでもいゝことはどうでもいゝ。どうでもいゝことはかいてもかゝないでも、どうでもいゝ。僕達はどうでもよくないことをかきたい。かゝないではゐられないことをかきたい。少くも本當になつてかけることをかきたい。職業意識では一行もかきたくない。又實感出來ないことは一行もかきたくない。かく以上は自分で本當に感じたこと、又經驗したこと、又生きたことがかきたい。

其處にこそ無限の味がある。

我等が男子一生の仕事として文學に志したのは、自然の意志、人間の意志、人間の本音を少しでも地上にあふれさ

したいからだ。そして生きた人間の心にふれたいからだ。

人間の正體をはつきりさせ、人間の要求をはつきりさせたいからだ。白樺の運動と云へるなら、この要求に向つて進んだ點をあげることが出來ると思ふ。白樺の人達はプロレタリアではないし、又プロレタリアになりたがつてもゐない。しかし眞人にはなりたがつてゐる。本當の人間の心もちをかきたく思つてゐる。又人間がどう云ふ生活を愛し、又どう云ふ意志に支配されて生きてゐるかを示したがつてゐる。勿論、之も人によつて程度がちがふが、自己に正直になり、自己を本當に生かさうとしてゐる點に共通があると思ふ。

○

白樺の人は社會や、政治のことにいくらか冷淡すぎたから、その後に、社會や政治に熱中する文學が出てくるのは順序として當然かも知れない。しかし白樺の一番の長所を無視してゐる。だから白樺のまいた種は今後本當にはえ出して、次ぎの文壇を占領すると云ふことも想像し得るのである。

個人は輕蔑され、又無視されておとなしく引こんでゐるものではない。又人類が多くの個人個人にわかれてゐるのも無意味ではない。個人が個人であると云ふことは面白いことなのである。この面白さがわからないものには人生はわからない。個人を手段視し、奴隷視するものは罰をうけるであらう。個人の面白さは、人類の豐富さを示し、人類が如何に調和して大きく生長するものかと云ふことを示してゐる。理窟でものを見る小つぽけ頭にはこのことはわからない。

文學の價値は、個人の價値と正比例する。個人個人としての使命をもたないなら、文學と云ふものは下らないもの

になる。最大文學者の、ゲーテ、ホイツトマンなぞ、いかに個人として生きたか。

個人として立派に、完全に生きたものからのみ、本當の文學は生まれる。個人が發達しない處にはいゝ文學は生まれない。

○

白樺の運動は、自然の意志、人類の意志を尊重して、個人がいかに生きるべきかを探究する運動なのである。このことを自覺してゐる人は少ないかも知れないが、白樺の人が何よりも實感を重んじ、眞心や、眞實を愛し、嘘を嫌つたのはそのためである。

ものを感じるのは結局個人である。人間は社會的動物でもあり、又人類的本能ももつてゐるが、人間が人間であるために、どうしたらいゝかを本當に考へるのは、矢張り個人である。個人を基礎にしないでは何事も出來ない。本をよむのも個人である。百人でよんでも、それを理解するのは個人個人で、その個人の受け入れる力による。

人類が生長するためには先づ第一に個人の生長が必要である。個人を生長さすためには各自が自分のなすべきことをすることで、自分に出來る範圍で最上の仕事をすることだ。

それが出來ないでは、人間が個人個人につくられたことは計算ちがひになる。しかし僕はさうは思はない。僕は個人は個人であることが面白いし、又いゝことだと思つてゐる。

個人が自己を正しく生かすと云ふことはどんなにいゝことか、個人を曲げること、個人の生長を害することがどんなに恐ろしいことか、本當に知つてゐる人は少ないと思ふ。

文學は個人の仕事だから面白いのだと思ふ。だから孔子の云ふ「和して同ぜず」が、個人同志の理想になり、そして又文學のあらゆる種類が共存することが美しいことを意味してゐる。

文學は誰もがよまなければならないものでもなし、又かゝなければならないものでもなく、かきたい人がかき、よみたい人がよみたい時によむ、其處が文學のよさであると思ふ。そしていろ／＼の文學があれば、よみたい時、一番自分にぴつたりするものがよめるわけだ。

白樺の人達はそのつもりで仕事をしてゐる。讀みたい人がよんでくれ、喜んでくれる人が喜んでくれゝばそれでいい。たゞ作家としては出來るだけ多くの人の心の一番奥にふれたいと思つてゐる。

○

大體以上で白樺の文學はどう云ふ種類の文學かわかつたかと思ふ。

まとめて云ふと、

『各自、自分のかける範圍を出來るだけ完全にかくこと、他人がかけることは他人に任せること。

「實感を重んじて、嘘は見えない處まで良心するどく排斥すること、實感こそ無限の深さを暗示するものだ。

「本當になつてかけることをかくこと、全力を出し切れる材料にのみぶつかること。

『内からかくこと、外からつくつたものはかゝない。内面的眞實からはなれないこと。』

それ等が白樺の特色になつてゐると思ふ。

○

もう一つの特色は、天才讃美であつた。

白樺の仲間の人は西洋の畫が好きだつた。セザンヌやゴオホ、ゴーガン、ロダンなぞ白樺の人達に隨分影響を與へた。

又ホイツトマン、ブレークなぞも白樺の人達に隨分影響した。それ等の人は實によく自己を生かした人として彼等に愛された。

食ふに困らなかつた彼等は、純粹に何にも恐れずに愛し得るものを愛した。彼等は人生の灰色をよろこばなかつた。仕事に冷淡な人をよろこばなかつた。中途半端を好まなかつた。

自己の仕事に沒頭し、忠實無比に自己の仕事をし上げた、人類的な藝術家を愛した。

文藝や、天才や、人生を熱愛することを彼等は教へた。それで一時、白樺熱が若い連中に流行し出した。今やそれ等の多くはプロレタリアの運動に入つたらしいが、しかし一時は白樺の熱は若い人を燃やした。

しかしその熱は秀れた才能をもつ人でないともちこたへられないものだつた。又享樂的な人はわきにそれるより仕方がなかつた。

今でも彼等のまいた種は少數の人にうけつがれてゐるが、それ等の人はまだ頭を社會的にもち上げて來ない。來つゝあるが、それで人々は白樺の運動はすぎたかに思つてゐるが、僕はむしろ之から、本當の文學が起つてくることを信じ、それ等の人に何等かの影響を與へることを信じてゐる。

つまり文學の仕事に一生をぶちこめる人は、白樺流のゆき方をするより仕方がないと思つてゐる。古今東西の天才

の歩いた道を歩かうとするものにとつて、日本に白樺の運動があつたことは意味があることになると思ふ。

いくら淋しくも自己の道を歩く、忠實に歩き通す。さう云ふ人々は白樺の內に知己を見出すであらう。

自己に正直になると云ふことは美德である。文藝の士にとつては最初の條件である。しかし之が樂な仕事ではないのだ。思つたより困難なのである。殊に日本の如く、お弟子根性の强い國民ではなほ困難である。それだけ淋しい道を歩くものには白樺の人々は朋友になるであらう。

人類が生長するためには個人は徹底して進歩するのがいゝし、徹底して良心を働かした仕事をすることが必要なので、その必要なものを白樺の人達は持つてゐる。

民衆と共に饒舌ることの出來る作家には、白樺はつまらない存在かも知れない。しかし民衆とは異つた道を歩くのを恐れないものには白樺はいゝ伴侶になるであらう。

我等は民衆は馬鹿にはしない。しかし民衆に媚びようとは思はない。自分に何處までも忠實になり、自分が本氣になつてかけるもの計りを、自分の藝術的本能に從つてやつてゆかうと思つてゐる。

他人にわかつてもらふために、自分の良心をごまかさない。

我等に創作させるものは人類の意志である。だから我等はかく時、自分の血や神經が人類全體にしみこみ、ゆきわたることをのぞんで筆をとる。しかし個人がまだ人類の意志を受け入れるだけ生長してゐない時、人類の意志に不忠實になつてまで人々にわかつてもらはうとは思はない。ある個人にわかつてもらへないのはやむを得ない。それはわからない方がまちがつてゐる場合もある。僕達は人類の意志に從つて仕事をしようと思つてゐる。その他は問題にす

ることを恥ぢてゐる。

○

この人類の意志に支配されて仕事をしてゐるものを僕達は天才とよんでゐる。天才の作品にふれることで我等は生きる喜びを得るのである。我等の生命が充實してくれ、こんな人間もゐるのかと云ふ喜びを得る。彼等は我等より深い動機で仕事をしてゐる。忠實無比な仕事、充實し切つた仕事をしてゐる。ごまかし仕事は勿論、頭のうごかないやうな仕事はしてゐない。描寫は的確で、要領を得、かゆい處に手がとゞいてゐる以上で、リヅムはなりひゞいてゐる。我等はそれを讀むことで滿足するのである。

さう云ふ作品でないと我等は尊敬出來ないのだ。だから尊敬出來る作品には滅多にふれられない。しかし其處までゆかない作品では物足りない。日本でもさう云ふ作品をつくり出さないでは我慢が出來ないと云ふのが彼等の運動だつた。あとで千家元麿が詩人としてこの仲間に入り、畫家ではあるが、岸田劉生もこの仲間に入れることが出來るかと思ふ。倉田百三も、この仲間の一人としてもいゝかと思ふ。自己の道を正直に歩いてゆくもの、一生ぶつ通して本氣になれる道を歩くもの、自己の足で立つもの、それが彼等の仲間である。ごまかしものや、黨派根性のあるものや、ある主義でものを見るものは、彼等にはもの足りない。自分の足でたち、自分の實感でものを云ひ、他の不純な動機に負かされずに、忠實に自分の仕事をするものが、彼等に愛され信用される。

彼等の先輩では夏目さんや、獨歩にさう云ふ處があつた。その人の生活の深さからあふれ出ない言葉は彼等にはものたりないのだ。個性の價値を本當に知つた處に彼等の特色があるとも云へる。

しもそれはわざと出した特色では面白くない。自づと出たものでなければ、奇を好むことを彼等はよろこばない。平凡に見えることは恐れない。たゞ全心をこめて本當のことを云ひたいのだ。

○

自然主義の人達も、自然を何處までも正直に見ようとした。しかし日本の自然主義の作家達はかゝないでゐられない氣持が、白樺の人達とちがつた。白樺の人達は、自分が默つてゐられないことがかきたかつた。内心の要求の方が主なのである。同じ描寫をするのでも、無意味や、職業的描寫では滿足しない。内面生活と結びついてゐることが必要なのだ。心が動かない描寫をすることは元より好まない。白樺の人にもいろ／＼あるが、大體云つてさうである。それから人生を愛し、尊敬してゐる點も特色かと思ふ。

○

白樺の作家達は今や多くは四十を越し、あるものは五十に達してゐる、前程、我むしやらではなく、おちついて來てはゐるが、今でも本氣になつて、自分の一番かきたいものをかくことは昔とかはりがない。たゞいくらかづゝ他のものにたいして寛大になり、東洋的になつて來てゐる。

もし歴史的に見て、白樺が日本の文學史にどう云ふ足跡をのこすかと云ふことは他の人の方が知つてゐるかと思ふが、しかし白樺の一番の特色は存外多くの人に知られてゐない。

なぜかと云ふと白樺の運動の一番大事な點は今の日本の文壇では一番無視されてゐる點とも見られるからだ。

個人とか、個性とかを通して人類の意志を生かすなぞと云ふことは今の人の見當もつかない點だと思ふ。しかし其

處がわからないでは白樺の運動のことはわからない。

つまり我等をして創作させるものは何か。

この何かをいろ〳〵解剖することが出來ると思ふ。

第一金である。金とるために商品をかく、かゝなければ食へない。其處で新聞や雜誌の註文通りのものをかく。しかしそれなら金を自分で出しても創作を發表する本能は何處からくるか。

第二、名譽心、だがかけばかく程惡口を云はれることを知つても、なほかゝないではゐられないのはどう云ふわけか、かう云ふ風にかけばほめられることを知りながら、わざ〳〵賞められないやうなかき方をするのはなぜか。名譽計りをあてにしてゐたら創作家は遂に失望し、絶望するにちがひない。批評家の註文通りのものをかいて賞められたがる作家はいかに見じめであるか。

第三、それなら何か。性慾か。性慾から生れる文學もあるかも知れない。しかし性慾なら文學よりもつと直接法なものがあるし、文學の內に性的なものとまるでちがふものがある。本氣になつてかけばかく程性から超越する場合もいくらでもある。早い話しが、裸婦をかいても、かくことにムキになれば性慾は何處かへ行つてしまふ。性的で仕事にムキにはなれない。

第四、それなら何か。自分の內にあるものを他人にまちがひなくつたへたい本能が文學を生むのだと思ふ。しかしそれにもいろ〳〵ある。功利的な立場からものをかく場合がある。しかしさう云ふ時、結果が功利的にならなかつた

らどうなる。もつと純粹に我等の內には他人につたへたいものがあるのではないか。熱の高いものは自づと熱の低いものに熱を送る。それは自然である。我等が、川へおちかけてゐる人を見れば思はず聲を出す、之は自然ではないか。又何か面白いことがあると他人に饒舌りたくなる。戰爭した人はたえず戰爭の話をしたがる。眞理をつかんだものは、その眞理を人に話したがる。自分の內に人生に役に立つものを多くもつてゐるものは、そのことを饒舌りたくなるのは當然ではないか。それを饒舌らすものは何か。

我等の內の血は全身を廻りたがつてゐる。それのやうに我等の內にある、本當の經驗は他人に默つてゐられないのは當然ではないか。その經驗したことが他人の生命と交涉があればある程默つてゐられないのは自然ではないか。僕達に筆をとらすのはこの自然ではないか。だから默つてゐられないのは當然ではないか。この當然な力に支配される程度で作品に力がこもるか、どうかがきまるのだと思ふ。

だから今プロ派の人々が一番ムキになつて仕事が出來るのは當然だと思ふ。だがそのムキになる理由が、人類の病的現象にたいする應急手段として起るムキさで、しかも應急手段としてはあまりに型が出來すぎてゐるので、文學的には面白くない。新鮮な感じがしない。お弟子根性の强いもの程大膽になれるものだが、よむ方は閉口する。頭は自由自在に動きたいものだが、竹筒に入れられた蛇のやうに動かされては閉口する方があたりまへである。若々しい頭をもつてゐるものが、自由自在を欲しないのは寧ろ不思議な氣がする。

僕達の欲するものはもつと强大なタガ破りである。竹筒のなかを通ると竹づゝが自づと割れるものである。

他人のつくつた者はどんなに秀れてゐても、文學者にとつては害がある。宗教的作品はどうも面白くない。内村鑑三氏のかくものもクリスチヤンになりすぎてゐたのを自分達は惜しがつたものだ。

僕達は白樺の同人が食ふに困らなかつたのは强味でもあり、弱味でもあり、又强味でもあると思つてゐる。經驗の範圍がせまいのはその弱點である。しかし純粹な氣持で文學がやれたのは强味でもある。殊に日本のやうに、お弟子根性の强い人が多く、自己を持たない人が多い時に、自己を生かし切ることを主張し、我むしやらに生きようとした仲間が居たことは無意味ではないと思ふ。

個人が侮辱されることは壓制を意味する。個人が自由をたのしめ、獨立人として生きられる世界は一番いゝ世界である。今では獨立人になれる人は少ないが、しかし個人の尊嚴は主張されることを人類は望んでゐるのである。奴隷人には思想の自由がないと同時に個性の面白味がない。打つてはひゞく氣魄が感じられないと面白くない。

文學の世界では巨人が必要である。白樺の中から天才が出たかどうか、それは知らないが、ともかく眞の文學が生まれる時、我等のゆき方がよかつたことがわかるであらう。

古今東西のどの天才をとつて來ても、我等のゆき方をしてゐる。他のゆき方をしてゐるものはない。ある主義をもつてゐたにしてもそれで彼等は自由を失はなかつた。いゝたいことを云はないやうなことはしなかつた。他人や仲間の顏色は見なかつた。云はないではゐられないこと、書かないではゐられないことをかいた。

○

白樺の道は別にかはつた道ではなかつた、文藝を本當の文藝として一番すぐれたものを生み出さうとしただけだ。

各自が自分に許された道を力強く歩くことを望んだだけだ。

だから文學上に別にあることを主張しはしなかつた。どの文學でもいゝ、どんな文學論でもその肯定の半面に於ては是認していゝ、しかし否定の半面には贊成出來ない。それが僕の考へ方だ。

自然主義、惡くない、隨分いゝものが出てゐる。しかしロマンチツクを否定したら、その否定はよくない。ロマンチツクなものでも秀れていゝものがある。文學の世界はひろい、どれでもいゝのだ。たゞいけないのはごまかしものだ、考へ不足だ、柄にあはないことをかくことだ。

甲は常に甲であつていゝ。乙は常に乙であつていゝのである。たゞ甲は常により甲になり、乙は常により乙にならなければならない。

しかしそれも意識してなつたのでは面白くないのである。

○

日本人は他人本位で育てられる。すぐ「そんなことをすると他人に笑はれる」と子供の時から云はれる。

しかし我等は他人のために生きてゐるのではない。我等は內からくる力で生きてゐるのだ。この力に忠實にならうとしたのが我等である。

內心の要求、それをやかましく云ひ出したのは白樺の人達ではないかと思ふ。

人類愛とか、人類の意志とか、內心の要求とか云ふ言葉でよく笑はれたかと思ふ。しかしこの要求なしに文學は生まれないのだ。內心の要求計りで言葉は生まれない、しかし言葉が生まれるのは內心の要求があるからで、要求のな

い言葉は生まれない。それと同時に文學も内心の要求なしには生まれない。しかしその要求にもいろ〳〵ある。その要求が力強く純粋であることが大事である。

その要求が弱く、他の要求が強い時、その作品は通俗に墮したり、淺薄になつたりする。ごまかしものにもなり易い。未熟なものも出來る。要求が強い計りでも未熟な幼稚なものになるが、要求のない處に力強い作品は生まれない。だからいゝ作品をかくには賢くなること、人々の生命を愛すること、人々の運命を心配することなぞが大事である。又人事計りでなく、自然その他にたいする興味の深さも必要になる。要するに、文學を志した以上、人類の寶になるやうな文學をつくりたい。それがつくれないやうなら文學はやめた方がいゝ。少くも文學者だとは云はず、たゞ道樂にやつてゐると云ふより仕方がない。

（二）

白樺の同人は、文學の標準を高くもつて、人類に役に立つ作品をつくりたく思つて文學をやつたのだ。日本の空氣は人間をいぢけさすことがうまいと考へてゐた彼等は、時に我むしやらであり、「今に見ろ」なぞと叫んでゐたが、しかしそれだけ仕事には熱心であり、又熱心な人を愛した。

一生をぶつ通して自分の藝術を熱心に築き上げたものを彼等は愛した。

ロダン、セザンヌ、ゴオホなぞ、さう云ふ點で理想的人物として彼等は尊敬した。

古の人間の方が、個人として今の人間より大きな仕事をしてゐるのは、傳統もよかつたらうが、それと同時に、他のことに氣を奪はれず、全力的に仕事が出來たからである。十力があるとすると古の人は十の力を一つにして自分の

道をひたすら歩けた。しかし今の人はよし十力があつてもいろ〳〵のことに氣が奪はれて、自分の仕事には五つか六つ切り力を入れられない。だからかくものが何となく手うすで、力が不足して見える。線一つひくのでも全力的修業がつんでゐる人と、つまない人とはちがふわけだ。一人で碁も將棋もマジヤンもハナもやる、どれもいゝ加減にすますことになる。心の入れやうがちがふ。だから今の人でも、心を一つにまとめて自分の仕事に沒頭し、他の人や、事に動かされない質の人は大きな仕事をする。ロダン、セザンヌ、ルノアール、ブルデルなぞはそのいゝ例である。一つのことに全力をそゝげる、さう云ふ人を熱愛し、一生の力をつみ重ねて仕事をした人に驚嘆する、それが白樺の人の理想のゆき方である。

○

普通の仕事や、ごまかし仕事では我慢が出來ない。全力的な仕事がしたい。又全力的な仕事を十年二十年、三十年とやらなければ自分の仕事はものにならないのが、あたりまへだ、さう考へて、自分の仕事に精進しようとしたのが白樺の人達である。

他の人にもさう云ふ精進をしてゐる人があれば、白樺の人は、我黨の人として尊敬する。

決して自分の仲間だけよくなればいゝと云ふのではない。日本に優れた文藝が生れゝばいゝのだ。

○

だから白樺の特色は自己を生かすと云ふ點にあると見てもいゝ。自己を忠實に大きく生かすことを、自分にも望み、他人にも望む、それが白樺のゆき方であり、人間の生命を手段視せず、又自分の都合のいゝやうにまげようとせず、

すべての人が自己を忠實に生かすことを望んでゐる。それが白樺だと云つてもいゝ。

「和して同ぜず」それが僕達の望みである。自己を生かすことでます〳〵他人が自己を生かすことに役立つ。お互が自分を殺しあはずに調和してゆく、自己を正しく生かせば生かす程、他人の個性も生きる。ホイツトマンが自己を生かしぬいてくれたことは、又僕が自己を生かすのに實に役に立つてくれてゐる。トルストイだつて、ドストエフスキーだつてさうである。フランスの畫家セザンヌがこつ〳〵自分の藝術的本能に忠實無比になつて仕事をしてくれる。それが僕達を心からよろこばす。皆自己をいつはらずに仕事をしてくれる、それが一番嬉しいことなのだ。共處に人間の面白さを見てゐる。

それが白樺の連中なのである。

だから自己をまげたものは好きになれない。それは人間を侮辱するもののやうに思はれる。

妥協をせずに自己を生かしぬくこと、それがつまり他人と最も深い處において調和して生きてゆくことになる。共處が面白いのだと思ふ。妥協と云ふのは自己を曲げたり、いつはつたりして他人と仲よくしてゆくことである。調和と云ふのは自己を生かし切つた同士が、仲よくつきあつてゆくことである。妥協は自己に正直になることによつてくづれる、調和は自己に忠實になればなる程得られる。

眞の詩人は妥協しない、たとへば芭蕉や、一茶の句は妥協してはゐない、だが我等は喜ぶ。妥協してゐない處がうれしいのだ。

フランスにルオーと云ふ畫家がゐる。僕はこの畫家の畫が始め大嫌ひだつた。だが彼はます〳〵彼になることで、

とう／＼僕は彼の書を熱愛するやうになつた。彼が自己を生かすことは、又僕の自己を生かすことになつた。根において一つなのだ。その一つの所が生きたのだから、僕も生かされることになる。

其處が面白い處だ。

お世辭を云つたり、自己をいつはつたりするものに僕等は感心出來ないのは當然である。僕等が感心し切るのは自己を生かし切つた人に限る。それと同じく僕等は又僕等を生かし切ればいゝのだと思つてゐる。唯生かすと云ふことは樂でないだけだ。純粹に自分になり切ることが必要なのである。自分をます／＼賢く深め、自分の才能をます／＼冴えさすことが必要なのである。それが出來れば、自己を生かすことは他人を生かすことになるのである。

このことを本當に知つたのが白樺の人達と云つてもいゝやうに思ふ。なぜかと云ふとかう云ふわかり切つたことが日本の批評家にはわかつてゐないからである。彼等の多くは自分と同一色のものでないと面白がらない、感心しない。人間がかたより、いぢけ、小さくなることを望んでゐるやうだ。つひには人間が自己を持つてゐるのさへいけないやうに云ふ。

人類の意志を知らなすぎるものと思ふ。

昭和六年七月十日印刷
昭和六年七月十五日發行

岩波講座 日本文學 第二回配本

版權所有

編輯兼發行者 印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田 岩波書店

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02953 2645

PL
726
.6
M87